

翻訳成功の秘密を探る

「アーサー・ウェイリー『源氏物語』の翻訳者」(平川祐弘著)

翻訳は、異なる言語文化のあいだに橋をかける。アーサー・ウェイリーの名訳という橋があって初めて、「源氏物語」は“二十世紀英語文学”の傑作と認知され、世界文学の古典となった。著者は、その成功の秘密を探る。

西洋文芸の原理が模倣ならば、翻訳もまた、原典の擬態となるだろう。だがウェイリーは翻訳をお能の舞台に託す。複式夢幻能では、ワキの僧の誘いに乗って、シテ(主人公)が、霊界から現世へと亡霊の姿で渡ってくる。その越境の橋掛りにこそ、翻訳の役割があり、異界の亡霊を成仏させるのが翻訳者(僧)の功德となる。

翻訳は降霊術なのだろうか。ウェイリー自身は不可知論者を標榜(ひょうぼう)したが、謡曲の「葵上」への感化が「源氏物語」への関心を目覚めさせたことは確かだろう。六条御息所の生霊が夕顔をのろい殺し、葵上にも憑依(ひょうい)する。ウェイリーはそれを深層心理学の「無意識」を借りて現代の読者の目によみがえらせる。

その妙技を解き明かす著者は、返す刀で、サイデンステッカー訳「源氏物語」を斬(き)って捨て

る。空蟬(うつせみ)の光源氏との「夢」のような逢瀬(おうせ)に「悪夢」の訳語をあてたからだ。それゆえ北米では「源氏物語」レイブ説が発生した、と著者は断定する。

思えば「日本事物誌」の著者チェンバレンも、「怪談」の著者ハーンの日本生活に「悪夢」を見た。だが著者はこの「悪夢」説に異を唱える。「幽霊」好みと「悪夢」嫌いの表裏。そこに著者の無意識な通奏低音を想定できようか。

ロンドンの文芸界を主導したブルームズベリー・グループ。その周辺に位置したウェイリー自身、年上の「奇女」ベリルと、ニュージーランド出身の「夕顔」アリスンとに挟まれ、女性の嫉妬(しつと)に翻弄(ほんろう)された。著者はそこに平安朝の恋を重ね合わせ、ウェイリーに「学問世界のShining Prince(光源氏)」を見る。

和漢洋の詩魂が自在に往還し、辛口な批評精神が生動する。著者会心の実践的翻訳論大全である。(稲賀繁美・国際日本文化研究センター教授)

(白水社・4200円) = 2008年12月18日⑤配信